

はくぶつかんの部屋 21

カルスト地形の博物館



みなさんは「琉球石灰岩」をご存知でしょうか。昔から、芋洗い用のトーニヤ石獅子の材料などに利用されています。宜野湾市の大部分は、琉球石灰岩

の上であり、この石の特徴が、宜野湾市の地形に大きな影響を与えています。その特徴とは、水を通しやすいことで、雨として降った水は、琉球石灰岩の層を通り抜け、下にある島尻層群という水を通しにくい層の上に溜まりま

す。島尻層群とは「クチャ」と呼ばれるアルカリ性の粘土で、かつては髪を洗う時に使われていました。溜まった水は、地下で西に向かって流れますが、琉球石灰岩の層は、伊佐・大山・真志喜・大謝名・宇地泊で途切れており、豊かな湧き水として地表に現れます。これらの湧き水は、宜野湾市特産である太山の田イモ畑を潤しています。

「ポノール」、複数の「ポノール」が発達して落ち込んだ「ウパーレ」など、変化にとんだ地形が見られます。

このように琉球石灰岩が溶けてできた地形をカルスト地形といいます。宜野湾市は、まさに「カルスト地形の博物館」です。宜野湾市立博物館では、9月14日(日)まで「宜野湾の台地と石灰岩台地でくらす人びと」と題して、宜野湾市の地形・地質の特徴や、そこに暮らす人びとの生活を紹介します。企画展を開催しています。今年の夏は、博物館で宜野湾市の隠れた秘密を発見してみませんか。



↑ 普天満宮洞穴の内部の様子

【お問合せ】市立博物館 ☎870-93317
入館料無料となっておりますので、お気軽にご来館下さい。

茶ぐわーゆんたく

10年の時間を経て

戦後沖縄では、軍事基地があるためにいろいろな被害が起きています。宜野湾市でも中心部に普天間飛行場が位置しているため、米軍機の墜落事故・騒音被害、環境破壊・雨水流出、排水による水質土壌汚染・廃油流出、それに加えて米軍人・軍属による犯罪などが、市民の日常生活に支障をきたしています。

今から42年前、1972(昭和47)年12月4日に、宜野湾市の沖縄国際大学建設現場に普天間飛行場所属の米軍機の燃料タンクが落下したことで、作業員がガソリン浸しになり、さらに建設中の鉄筋コンクリート壁に亀裂が生じたという事故が起きています。それから32年後の2004(平成16)年8月13日、普天間飛行場を飛び立った米軍ヘリが、隣接する沖縄国際大学の本館校舎に墜落・炎上した事故が起こりました。一歩間違えばあわや大惨事になりかねない大きな事故でした。幸いにもこの事故では、米軍の乗員3名が重軽傷を負ったものの、民間人や大学にいた学生、職員に死傷者は出ませんでした。しかし、事故を起こしたヘリの部品が広範囲に飛び散り、民家の窓ガラスを破損させたり、

オートバイの上にプロペラが落下してきたりと多数の被害が出ました。

沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落してから今年で10年が経ちます。事故により損傷した本館校舎は新しく建て替えられました。現在、事故があった場所はポケットパークとして小さなスペースが設けられています。当時の詳細をパネルにした説明板があり、平和学習等で使えるようになっていきます。

戦後69年が経った今でも軍事基地は存在しつづけています。このような状況がみなさんにとって、平和とは何かと考える材料の一つになってほしいと思います。



▶ 燃料タンク落下 (沖縄国際大学) 1972(昭和47)年写真集「ぎのわん」

▶ 現在の沖縄国際大学のポケットパーク 後方左に被害を受けたアカギの木が見える。

「宜野湾市史への問合せ」
文化課 市史編集係(市立博物館内)

☎870-93317

